

2016年7月26日未明、相模原の津久井やまゆり園における「障がい者殺傷事件」から6年経ちました。この事件の衝撃は、今でも強く記憶に残っています。

植松死刑囚は、「ヒトラーが降りてきた」などと話していたそうですが、ナチスドイツの障がい者の大量虐殺（T4作戦）では「優生思想」のもと、多くの医療関係者が、ナチスが作戦を終了した後も、いわば「自主的に関与した」ことが伝えられています。2010年にドイツの精神医学会が虐殺に加担したことを認め、謝罪していますが、この「自主的に関与した」事実を忘れてはいけなと感じます。

そして相模原の事件について、「ひどい」「差別はよくない」とだけで済ませてしまったり、「自分とはちがう“異常者”の犯罪」として片づけてしまわずに、「社会全体の問題」「自分自身の問題」として、向き合っていきたいと思えます。

まもなく8月。信州らしいカラッとした夏の日差しが待ち遠しいところです。太陽の光は、差別なく誰にも降り注ぎます。そんなふうに、誰もが幸せになれる世の中になってほしいものです。何より、障がい福祉の仕事に「やればやるほど、障がいのある人のちからや魅力に気づける」日々を、またそれが、支える者たちの持つちからの気づきともなる日々を、わたしたちはめざし、重ねていきます。

